レポート

The International Symposium on Calorimetry and Chemical Thermodynamicsに参加して

表記シンポジウムがブラジル共和国のサンパウロ市から100 kmほど離れたカンピナス市で開催された。ブラジルと聞くと思い出す，ジャングルとカーニバルなどの騒々しいあるいは“楽天主義とダイナミズム”のイメージとは異なり，地平線までの緑豊かな草原と丘の中に近代的な高層ビルと昔ながらの煉瓦造り家屋の混在した，花で飾られた静かな町であった。シンポジウムは当初カンピナス州立大学の学会センターで開催される予定であったが，ハリケーンのため屋根が吹き飛ばされて，改装が遅れたために，直前にFAZENDAホテルの会議室に変更された。このホテルは最盛期には1000人もの奴隷で操業していたコーヒー農園を博物館風に保存したもので，キャンプ地，ゴルフコース，アスレチック，プール，アミュズメント施設など近代的施設の整った広大な敷地を有する総合レジャーランドで，朝夕カンピナス市中心のそれぞれのホテルから30分の送迎バスが準備された。今回のカンピナス市での開催の主な目的はラテンアメリカとその他の国の研究グループが研究交流できる機会を作り，科学者の研究の輪を拡大し，熱量測定と化学熱力学領域の最新の話題についての討論から発展途上国の若い研究者に国際学会で発表する機会をもってもらい，研究活動を奨励しようというIUPACプログラムの一環として行われ，ラテンアメリカでのIUPAC後援の初めてのシンポジウムである。

組織委員C. Airoldi (Brazil), J. Barthel (Germany), J. Bevan Ott (USA), Daniel de Namor (UK), J.A.Martinho Simoes (Portogal), H. Suga (Japan), I. Wadsö (委員長, Sweden) (敬称略) が約2年前から開催を計画組織し，現地組織委員であるC. Airoldi, A. Z. Francesconi, J. A Simoni, P.L.O. Volpe, W. Loh (Campinus), A.G. de Souza (Joao Pessoa), C. A. Montanari (Belo Horizonte) (敬称略) の惜しみない尽力で成功裏に運営された。参加者はアメリカ，アルゼンチン，イタリー，英国，オーストリア，カナダ，コロンビヤ，スイス，スペイン，チリ，デンマーク，ドイツ，日本，ブラジル，フランス，ペルー，ポルトガル，南アフリカ，メキシコ，ロシヤの20ヶ国，129人で，約40％がラテンアメリカ以外の参加者であった。今会議の開催目的通り，通常西側で開催される国際学会ではほとんど参加が見られないラテンアメリカの研究者が多く参加された。

ブラジルはビザ関係が非常に複雑で入国審査場でビザの申請を知らされ，入国しないでそのまま帰った人もいたそうで，西側の国とは全然違う対応である。また南米諸国の中ではほとんどダークスーツなど必要としない非常にフランクな国で，周りの国とは言葉も違うが生活に対する考え方が全然異なるようである。

開会式は現地組織委員長Claudio Airoldi教授(UNICAMP)の司会で組織委員長Ingemar Wadsö教授(Lund Univ.)，IUPAC代表Gerd Olofsson博士 (Lund Univ.)，ブラジル化学会の副会長のMaria D. Vargas博士(UNICAMP) の簡単な挨拶で始まった。シンポジウムは特別公演4件，招待講演9件，一般講演31件，ポスター発表80件からなり，特別公演は "Thermodynamic Approaches to Investigate Structural and Compositional Heterogeneities in Membrane Structure" R.L. Biltonen (Univ. of Virginia), "Interactions and Local Ordering in Polymer Solutions: A Calorimetric View point" A. Cesaro (Univ. of Triest, Italy), "Adsorption at the Gas/Solid and Liquid/Solid Interfaces: Interest of a Calorimetric Study" J. Rouquerol (Centre de Thermodynamique et de Microcalorimétrie

写真1 シンポジウム会場のFAZENDAホテル

du CNRS, Marseille, France), "The Role of Thermodynamics and Calorimetry in Biochemical Engineering" U.von Stockar, J. S. Liu, I. W. Marison, L. A. M. van der Wielen (Swiss Federal Institute of Technology, Switzerland, Technical Univ. Delft, The Netherlands) で，招待講演，一般講演，ポスター発表では伝統的な溶液の熱力学量から生体関連物質，単細胞，小動物，生物工学，グループ論，シュミレーションの広い範囲ににわたる発表で，研究対象はほとんどが生物，生体関連物質および溶液の熱量測定の研究で濃厚な討論が小グループ間で見られた。セッション間に20分のコーヒーブレイクをとってあったが，休憩後会場に戻ってきても議論している方々を見かけた。範囲があまりにも広いためではあるが，普段あまり参加しない部門で何が問題になっているのかを聞く機会が得られた。しかし招待講演と一般講演は2会場に別れて行われ，面白いタイトルの発表が重なったのが非常に残念である。日本からは菅 宏教授と木村隆良（近畿大学）の2名の参加であり，菅先生は"Calorimetric Studies of Some Energy-Related Materials"のタイトルで招待講演をされ，木村は"Excess Enthalpies of Alkylbenzene + Methyl Methylthiomethyl Sulfoxide, + Dimethyl Sulfoxide at 298.15 K"の講演と "Thermal Properties of Hydrate Crystals of Guanosine"のポスター発表を行った。3日目の午後は学会主催のバーベキュが準備され，開会のスピーチ無しでカシャーサという強い酒から始まり，ブラジル音楽とともに会食を楽しんだ。食事が一段落するとサンバのリズムにあわせて，ブラジルのイメージ通りのダンスが始まった。踊りはじめたのはまず女性陣で会場の男性陣を踊りに誘い出し，大きな輪の中で楽しんだ。この手厚いホステスぶりに男性陣も奮起，菅教授も踊りの輪に加われた。また演奏家の求めに応じてタンバリンを担当され，合唱を楽しんで会場の拍手喝采を浴びられた。あとで菅教授が本学会最高の名手であるというDiplomaを受けられたのも，この国らしい演出ぶりである。しばらくすると若い人はすぐ隣のサッカー場で国際混成チームによる試合が行われ，一汗かいて親善を深めた。また古いコーヒー農園の博物館についての見学会が行われ，過去の暗い奴隷制度を隠すためほとんどの資料が焼却された中でこのホテルのオーナーが特に注意して残している貴重な資料を拝見できる機会が持てた。ガイド

写真2 開会式でスピーチされているC. Airoldi教授

があまり英語ができなかったのでポルトガルの研究者が通訳して説明するという国際学会の利点が生かされた。特にブラジルからの参加者の名前に日本名が多く見られ日系3世が大学内でがんばっておられるのが理解できた。ブラジルは先住民，ポルトガル人，スペイン人と移民などによるアラビア人，中国人，ドイツ人，イタリア人，ポーランド人，黒人などの人種が混在し，自分のルーツを大切にしていることがミッドルネームに母国の名前を残していることから想像できる。また西側から来られた教授方はフランクで丁寧に議論をされており，長い年月をかけて留学生を育て，その成長ぶりを見られているような終始暖かい雰囲気で討論されていたのが印象的であった。

最終日にはラテンアメリカとの共同研究と題したセッションが準備され，EUのラテンアメリカからの科学者招聘の様式と現状がA. F. Daniel de Namor教授より詳細に説明され，研究費を含めた非常に立派な隅々まで行き届いたプログラムであるがそれなりに烈しい競争があることが紹介された。また西側で第一線を退いた機器類も廃棄にしないで寄贈され，十分役立っていることが紹介され西側の研究者に可能性の呼び掛けが行われた。発展途上国への援助に対するいろいろの疑惑が新聞などで報じられている中で，最も地道な方法の一つではないかと思われる。

（近畿大学理工学部 木村隆良）